No.66　contents

1　第99回二科展開催　二科99回展によせて
2　〈絵画〉総評
3　〈絵画〉会員になって―制作の視点
4　〈絵画〉受賞作品―制作の視点　受賞者一覧
5　〈絵画〉受賞作品　ギャラリートークを終えて
6　〈絵画〉特選作品寸評
9　〈彫刻〉総評　会員になって―制作の視点
10　〈彫刻〉受賞作品―制作の視点　受賞作品寸評
12　event memo（セレモニー・作品研究会・ギャラリートーク・ナイトミュージアム・東郷青児作品展示室）
13　カウントダウン 二科百周年　凄い作品を見た　二科会五十年の思い出
14　被災地児童支援絵画教室　二科東北支部連合　二科巡回展日程
15　デザイン部・写真部　訃報　春季展日程
16　ベストセレクション展　トピックス　事務局だより　編集後記

二科

2015年　二科展は
100回展
を迎えます

秋季

発行人：田中 良　発行：公益社団法人 二科会
http://www/nika.or.jp/　TEL：03-3354-6646
E-mail：nika@nika.or.jp

1968年　第53回二科展・明治百年記念回顧展を同時開催。入場券：東郷青児

第99回 二科展開催

二科99回展によせて

田中　良

先ず豪雨による水害等に遭遇された支部の皆様に、心からお見舞申し上げます。幸い東京は天候にも恵まれ、十万人近い入場者で大盛会でした。

東郷青児先生の絵画・彫刻も特別陳列され、本展に大きな華を添えていただきました。

また会場全体の展示も、関係者の努力で、ギャラリートークとの関連もあり、工夫され、鑑賞者からも好評でした。

災害地支援のチャリティー展も四部会員のご協力で作品数も増えました。有難うございました。

宮城県の子供達の作品も派遣理事の指導で、飾れたことも大変よかったです。

来年の第１００回記念展に向けての準備に遺漏なきよう只今から心して始めましょう。

最後に、陰に陽に会を支えている事務局、それぞれの担当者に感謝致します。

絵画部会員　審査室にて

絵画部　総評

若手の台頭を感じる99回展

黒川彰夫

来年は、いよいよ１００回展を迎えることとなりました。公募団体の草分けとして、官展から独立したのが二科会で、今日までの間日本の洋画壇の歴史を築いてきた多くの注目作家を輩出してきた事は二科会の大な誇りであります。

そんな中、99回展は多くの入場者を迎え華やかに開催されました。会場に入ると、なにか気持ちの良い清涼感を感じました。この事は、会員作家の作品に大作が多く見られた事、２階、３階の二段がけ作品を部屋の中心に展示し空間を持たせた事、全体の色調が少し明るくなった事から来るものではないかと思いました。会員作家の大作志向は、１００回展へ向けての静かな意気込みを強く感じました。

審査にあたっては、昨年同様２点入選を出来るだけ出す事、アンダー35の作品充実を目標に進められました。

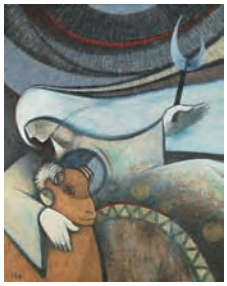
今回は、一般出品者の中に、優れた見るべき作品が多くあり、二科賞、パリ賞、損保ジャパン日本興亜美術財団賞、上野の森美術館奨励賞の大きな賞が全てここから出た事、そして、その中の２つの賞は、昨年同様にアンダー35からでありました。

特に最近、アンダー35の出品者が、徐々にではありますが増えて来ている事は、二科会を含めた公募団体に於ける悩みの一つである高齢化現象の歯止めになるのではないかと期待出来るところであります。この事は、早くから本会が取り組んできた若い作家に対しての対策が、徐々にではありますが浸透してきた結果ではないかと思います。

会友作家については、前述から受ける印象は、力作が少なかった様に思いがちですが、２点入選も多く、昨年よりも会員推挙も増し、充実した作品が見られた事は事実であります。

若手作家、会友の中堅作家のガンバリは１００回展以降の展望が少し開けてきた感があり、大変頼もしい印象を感じました。

遠い日Ⅲ　高畑　彰


祈り2014　及川 英之

生命のチカラⅠ　石橋 国夫

つきぬものたちへ2 石倉 妙子

KAO・hito　有泉　學

再生・復活　馬渕 寿子

出逢い　ナカムラ 延

港にかかる橋　髙松 良幸

ガラスの蜃気楼　鈴木 章司

駐輪場にて―2　北村 美佳

会員になって ―制作の視点

有泉　學

芸術の広い領域の中で絵画を通し、形、色、空間の豊かさを画面に捉えようと試行錯誤中です。実体と空間との絵画的融合を表現しようと模索が続いています。

第82回 特選／第85回 会友推挙
第89回 会友賞／第99回 会員推挙

石倉 妙子

無限の宇宙の中、すべてのものたちは、生を受け死を迎える。心は常に揺れ動く。ありのままを受け止め思い描いた景色に出会う瞬間の奇跡を信じてゆきたい。

第76回 特選／第79回 会友推挙
第89回 会友賞／第99回 会員推挙

石橋 国夫

日々の生活の中で、形あるものを描くのではなく、見えないけれど、心に響く感動を画面に定着したい。生命の力強いエネルギーが伝われればと思う。

第81回 特選／第83回 会友推挙
第88回 会友賞／第99回 会員推挙

及川 英之

東日本大震災で犠牲になった方々の鎮魂と被災地や多くの方が早く復旧・復興することを願い制作しました。思いを感じ取っていただければと思います。

第82回 特選／第84回 会友推挙
第87回 会友賞／第99回 会員推挙

北村 美佳

私は線が好きです。たった一本の線で、絵が生き生きと動き始める瞬間は、何よりも心が躍ります。そしていつか、美術館の空気を動かすような絵を描きたいです。

第80回 記念賞／第84回 二科賞
第85回 会友推挙／第87回 会友賞
第96回 パリ賞／第99回 会員推挙

鈴木 章司

私の中にある心象風景をリアルに表現することに努めました。画題の「蜃気楼」は私の心象風景をキャンバスに浮かび上がらせることです。

第68回 上野の森美術館奨励賞
第76回 会友推挙／第84回 会友賞
第99回 会員推挙

高畑　彰

重層化した思念を持つ、時間と透明性をテーマに描いています。時空を超えたイメージの重なりが、気ままに生み出す詩情性を求めて、日々試行錯誤の連続です。

第79回 特選／第81回 会友推挙
第84回 会友賞／第99回 会員推挙

髙松 良幸

街の記憶、特に住み慣れた港町の懐かしい記憶がテーマ。記憶から呼びさまされる時間や空間の距離感や、皮膚感覚を、視覚的な言葉に置き換え構成しました。

第81回 特選／第83回 会友推挙
第90回 会友賞／第99回 会員推挙

ナカムラ 延

キャンバスを右や左に回したり、逆さにしたり。絵とのにらめっこ、対話が始まり、ストーリーが生まれる。恋ひとつを追いかけて完成…。そして、反省…。

第94回 特選／第95回 会友推挙
第96回 会友賞／第99回 会員推挙

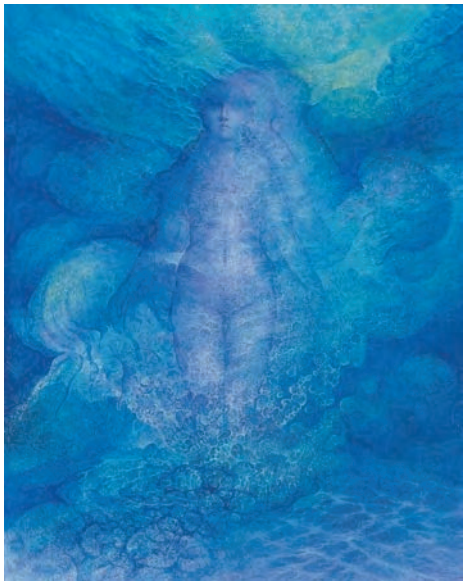
馬渕 寿子

永年心の情景を描いて参りました。特に「東日本大震災」は衝撃的で、地球の悲鳴や嘆きのようなものを感じました。文化や生命を何とか繋げられればと願う。

第60回 特選／第84回 会友推挙
第86回 会友賞／第99回 会員推挙

受賞作品 ― 制作の視点

内閣総理大臣賞　伝言―La, Vie, S'en, Va　190×290
横前 秀幸



東京都知事賞　海譜　F150
加覧 裕子

内閣総理大臣賞　横前秀幸

朽ち果てゆく美しさ―再生してくるいとおしさを常に感ずる山を背負う制作場で、山道の水溜りに写る未知と無限と分子と原子の宇宙観がそこに浮かんでいました。宇宙との境界線に踏みとどまる私の人生の一瞬も加え、詩的経験を大切に生かして描きました。

東京都知事賞　加覧裕子

油絵の具とキャンバスというアナログな物質をツールに、少しずつ丹念に塗り重ねる作業を繰り返し、いつかその物質が「光」を発する時を忍耐強く待っている。その作業は多大な根気と集中を要しますが、その工程で遭遇する発見はやはり魅力的で、これ迄の自分を導いてくれます。

第99回二科展 受賞者

内閣総理大臣賞　横前秀幸（長野）
文部科学大臣賞　津田裕子（東京）
東京都知事賞　加覧裕子（東京）

（絵画部）

二科賞
村山成夫（新潟）

パリ賞
吉田紗知（千葉）

損保ジャパン日本興亜美術財団賞
今村惠利子（熊本）

上野の森美術館奨励賞
髙木陽（東京）

会員賞
井上裕義（大阪）
関口成夫（群馬）
藤田由明（新潟）
吉沢智大（群馬）

会友賞
浦上光喜（熊本）
遠藤つるえ（千葉）
小野由紀子（福岡）
熊田奈穂子（千葉）
さとうのりこ（神奈川）
田辺幸子（新潟）
鶴田英輝（福岡）
古谷和子（神奈川）
三宅敦子（岐阜）
邑井吉治（石川）

特選
石井英司（福島）
伊藤真理子（岩手）
大槻薫（茨城）
奥山嘉男（三重）
小出明美（岐阜）
斎藤孝恵（神奈川）
田村忠男（新潟）
辻田悦子（三重）
土屋真理子（愛知）
中島幸恵（茨城）
名木美貴（東京）
三津川好則（滋賀）
宮井啓江（長野）
矢島和子（神奈川）
柳澤綾子（京都）
山田佳子（愛知）
山田雅子（岐阜）
柳賢淑（千葉）
渡邊恵子（神奈川）

新人奨励賞
島崎紗椰（京都）
鳥居裕太（愛知）
野上さやか（東京）
長谷川晴香（京都）
森川泰光（東京）

会員推挙
有泉學（東京）
石倉妙子（静岡）
石橋国夫（滋賀）
及川英之（宮城）
北村美佳（滋賀）
鈴木章司（愛知）
髙畑彰（大阪）
髙松良幸（広島）
ナカムラ延（千葉）
馬渕寿子（神奈川）

会友推挙
上石直美（福島）
吾田弘子（神奈川）
加藤光子（大分）
金折文男（広島）
岸ユキ（富巳）（東京）
草間俊雄（長崎）
菅原靖（東京）
鈴木真木子（茨城）
髙木陽（東京）
田中正子（京都）
津田佐千子（石川）
富秋和子（神奈川）
中井美甫（三重）
野平智広（鹿児島）
蜂須賀和子（愛知）
堀谷莉恵（熊本）
村山成夫（新潟）
安坂伸司（東京）
山下泰弘（千葉）
吉田紗知（千葉）
渡邉仁美（神奈川）

（彫刻部）

二科賞
該当者なし

ローマ賞
安田明長（東京）

彫刻の森美術館奨励賞
稲葉朗（東京）

会員賞
佐々木至（神奈川）
信時茂（東京）

会友賞
漆山昌志（新潟）

特選
古森清五郎（新潟）
篠木玲子（埼玉）
長谷川聡（神奈川）
吉田朋世（奈良）

新人奨励賞
浜田修子（東京）
与島雪（富山）

会員推挙
池田嘉文（東京）
宇野務（神奈川）
多羅間拓也（京都）
長谷川俊廣（愛知）

会友推挙
大場敏弘（長野）
角谷豊明（新潟）
藤岡浩二（香川）
細田愛由美（島根）
吉田朋世（奈良）
吉野ヨシ子（千葉）

ギャラリートークを終えて

中原 史雄

ここ数年、少しずつ若い作家が眼につくようになり、展示会場に新風を感じるようになった。今年は、色をカーマインに限定し異質の風景を創った高木陽「赤い丘―終焉―」、大胆なマチエールと空間表現で吉田紗知「白日」が、昨年の篠原涼子、山岡明日香に続き躍動した。U35室の効果も感じられ、会として明るい材料である。

しかし、他の面からみると重要なのは、長い間描き続けている多くの人たちの奮起で、それなくして明日の二科会はないといっても過言ではない。そうした中で、ハスを自分の造形に引き込み、緻密に描いた村山成夫「色はにほへど（舞）」、モノクロームで樹皮の形を執拗に捉えた今村惠利子「此処から」が積み重ねた視点と表現を見事に描出し受賞した。

改めて会場を見ると、他にもあと一歩という作品が何点も目に留まった。100回展に期待したい。

今年のギャラリートークは、公募展に出品するハウ・ツーがメインテーマ。絵画の展示総数1174点。その広い壁面で他の作品に埋没せず、存在感を示すにはどうしたらよいか。語った私見の一端を並べると、①構想を具現化する時、遠近法や明暗の自縛を解いて、画面の遠近大小は「心の遠近」で描いていく。②鮮明な色でも濁色でも美しさが大切、絵具はパレット上でしっかり混色してから描く。③つい想いが溢れ、あれもこれもと描いてしまって、何を言いたいのかわからない作品に。④一番大事なのは、柔軟に考えること、芸術表現は、「整理より混沌」だと知ること。

二科賞　色はにほへど（舞）　F100
村山 成夫

パリ賞　白日　S80
吉田 紗知

損保ジャパン日本興亜美術財団賞　此処から　F100
今村 惠利子

上野の森美術館奨励賞　赤い丘―終焉―　S80
髙木　陽

新人奨励賞　Wall　F80
野上 さやか

新人奨励賞　ここにいる　F50
長谷川 晴香

新人奨励賞　水色の庭（Waltz）　F100
森川 泰光

新人奨励賞　爛漫の夢　F100
島崎 紗椰

新人奨励賞　Japanese Happy Ogre
F100　鳥居 裕太

特選作品寸評

石井 英司 「崩れた安全神話Ⅲ」 F100

石井英司

青い重機が赤い建物か船等の残骸を力強く支えている。画面の半分は破壊された闇の世界か。中心の青い重機は明るい空間と共に明日への希望を表現して今にも動き出そうとしている。重厚で力強く心に残る。

（大隈 武夫）

伊藤 真理子 「燦と闇と A」 F100

伊藤真理子

明るい宇宙に舞い降りてくる女人が素直な表現で素晴らしい。黒い闇の世界が左から右へも移り力強い構成になって魅力的である。遊び心の充満する色彩の乱舞が、観る人を遠い世界へ案内する不思議な強さを持っている。

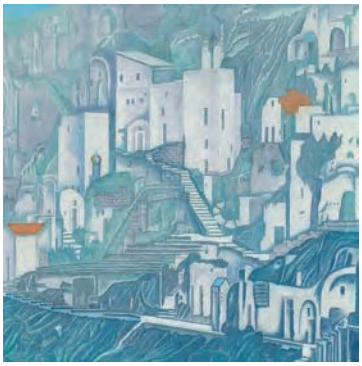
（大隈 武夫）

大槻　薫 「Métoro 14-4」 F100

大槻　薫

電車の中の広告、座席の人、つりかわ、座席も混んではなく人が少なくほっとする。電車の屋根、座席、窓の色と床の対比が見る人をひきつける。ただの遠近法ではなく素朴な描き方、これからの展開が楽しみである。

（大隈 武夫）



奥山 嘉男 「マテーラ(Ⅷ) イタリア」 S80

奥山嘉男

丘の斜面に建ち並ぶ白亜の建物風景であるが、地形の特徴を生かしての建物の垂直と坂道の斜が強固な画面構成になっていて、ブルーグレーの色調の中で白が美しい。風景の中での生活感や、人の気配の表現にも挑戦して欲しい。

（西　健吉）

小出 明美 「転生(1)」 F100

小出明美

人間の内面に潜む生命体のうごめきを感じる。豊かな色彩と抽象的フォルムの画面構成で独特のイメージの世界を展開しているが、中央の魚に似た物体には異様な感じが残る。

（西　健吉）

斎藤 孝恵 「街角」 F100

斎藤孝恵

演奏する楽師がモチーフで、V字形構図によって、動きと時間を呼び込んで、色彩の配置が効果的で、好感の持てる作品だ。欲を言えば、画面に散らした箔の様なものの扱いにもうひと工夫欲しいところである。

（松室 重親）

特選作品寸評

田村 忠男　「帰り道Ⅰ」　F100

田村 忠男

街の建物を、画面の上部と下位に手際よく配置し、中央の大きな空間を、崖とも壁とも見えるホワイトで明るく、清潔な作品になった。今後の仕事としては、よく構図を練り、この持ち味を生かした、作品を楽しみにしたい。

（松室 重親）

辻田 悦子　「熱情と冷静のはざまにⅡ」　F100

辻田 悦子

重量感のある大振りな構図と、しっかりした絵具の付きが、作品の魅力となっている。今後は、此の魅力を失わず、絵の中にハーモニーとトーンを配慮し乍ら、モチーフが変わっても良い作品を描いて欲しい。

（松室 重親）

土屋 真理子　「街②」　F100

土屋 真理子

この画では多少窮屈な面があるが、都会のビルをモチーフに重層的な構図と単純な色彩で、あるイメージを創り出すことには一応成功しているが、この画面に、何か謎めいたものがあると又、別の世界が現れるような気がする。

（松室 重親）

中島 幸恵　「コンポジションⅡ」　F100

中島 幸恵

英字新聞、布、文字の凹凸を大胆に構成して素晴らしい。色面の組み合わせも力と勢いがある。筆力のある色の重なりと強弱が成功している。構成力にすぐれた作品で、今後に大いに期待したい。

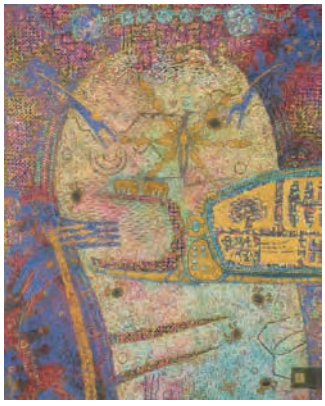
（大隈 武夫）

名木 美貴　「春の御苑・未来幻想」　F100

名木 美貴

少し抑えた陰影が、夏の名残を感じさせる。点描も使い、マチエールも工夫した丁寧な描き込みは好感が持てる。力強い樹と遠景の街のコントラストも良く、構図も確かである。何気ない日常の一コマを描いているようで、背景にある作者の思考が伝わってくる。

（中原 史雄）



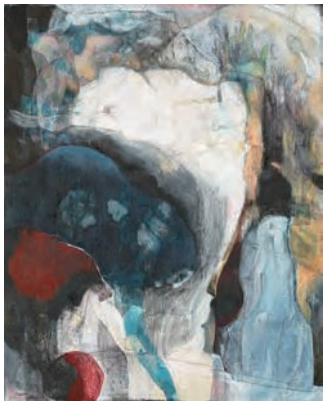
三津川 好則　「たゆたう」　F100

三津川 好則

人間を感じさせるフォルムが、浮かび上がるユーモラスな表現である。ゆらゆらと動いて定まらない心象の具現化だろうか。複雑なマチエール、明度差を抑えた微妙な色彩、ややインパクトの弱さを感じさせるが、それが特徴でもあるようだ。展開が期待できる。

（中原 史雄）

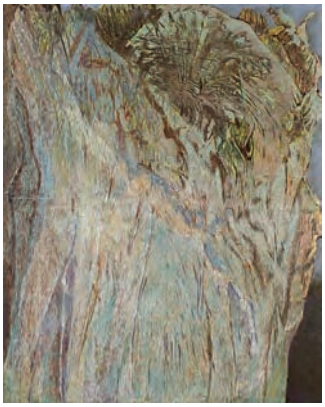
特選作品寸評



宮井 啓江 「思考の欠片１」 F100

矢島 和子 「心の響き―３」 F100

山田 佳子 「情熱と創造Ⅰ」 F100



山田 雅子 「Corrosion Log」 F100

宮井 啓江

裸婦をイメージさせる抽象的フォルムが伸びやかに描かれていて濃いブルーや赤が白系の色調の中で効果的で美しい。色彩センスの良さが窺えるが具体的な小さな形にも工夫を凝らしたい。（西　健吉）

矢島 和子

組み合わせた人体に、心の象を投影させながら描いているようだ。形に縛られない自由な色のリズムは、軽やかで心地いい。重心を画面上部に置き、背景を暗くすることで、拡がりのある表現に繋がるとともに、訴求力も強めている。色と形が響き合う作品である。（中原 史雄）

山田 佳子

トルソに似た大きな形が暗い空間の中で生きている。レリーフを思わせるような厚塗りで、茶系の色調が人間味豊かな温かい情感を伝えてくれる。コラージュの部分もあるが、効果については工夫して欲しい。（西　健吉）

山田 雅子

朽ちた古木の表現を画面一杯に構成した作品。丹念な描き込みとスクラッチにより、古木に生命を与え美しく再生を願っているようである。わずかな黒い空間が画面を引き締めて効果的であるが、形の切れる所を大切にしたい。（西　健吉）

柳澤 綾子 「Expansion」 S80

柳　賢淑 「Heaven」 F100

渡邊 恵子 「助六」 S80

柳澤 綾子

放射状に拡がる幾何形体の複雑な律動は、作者のポジティブな思考の具現化を感じさせる。黄色を中心に色を限定しているのが、形のリズムを際立たせる効果を生んでいる。どこかクールな視点と表現に独自性がある。より密度のある表現を期待している。（中原 史雄）

柳　賢淑

題名からみると、天国か楽園の心象風景とも見えるが、色彩とマチエールが交錯して、作者の記憶と連想が、絵画表現として成功した結果と思われるが、今後も制作を続けて、新しい発展を期待したい。（松室 重親）

渡邊 恵子

キャンバスの外へはみ出す真っ赤な大きい顔、歌舞伎の遊侠者である助六を描く。眼の中に映った見得を切る役者は団十郎だろうか。単純な形態、明快な色、そして、大胆な構成は周囲を圧するインパクトがある。画面右下の黒っぽいシルエットは一工夫あっていい。（中原 史雄）

彫刻部　総評

信念をつらぬく制作姿勢

登坂 秀雄

第99回二科展が9月3日から15日に亘り、国立新美術館において例年通り開催されました。一般の出品状況は近年下降線を辿り、運営に携る会員の間には危機意識があります。が、会友・会員の出品意識は高く、彫刻会場の印象は、活気に満ちた雰囲気を醸し出し、多くの鑑賞者に楽しい時を持っていただいたと思います。

来年の一〇〇回展に向けて、彫刻展示室の一〇〇㎡を拠出し、昨年は岡本太郎特別展示、本年は東郷青児特別展示を行いました。

東郷青児特別展示には、パリでキューヴィズムの影響を間近に受けた作品も展示され、二科の百年と重なり、考え深いものが有りました。二つのブロンズ彫刻も中心に設置され、最晩年に近い作品でありますが、構成力、力感、デテールに至るまで、表現意欲の高さ、制作姿勢に感服せられました。

キューヴィズムとロシア構成主義、イタリア未来派など二十世紀初頭の芸術運動の影響は、二科会彫刻部の歴史と、現在の出品作品の素材と表現の多様性にも現われ、時間軸と折り重なって進行して来た様に感じられます。

二科の多様な表現の個々の作品を活かすべく、本年の展示企画委員会も作家の固定位置を決めず、各展示室のテーマを決めて、全体展示に有機的導線を作ることをモットーに展示を試みました。

彫刻会場を見渡すと、例年も感ずることではありますが、素材、具象・抽象を問わず、泥臭くも信念を貫く制作姿勢が見られる作品があり、感動を覚えます。

近年、公募展として審査の難しい作品も増えてきました。表現の自由と二科会の理念を照らし考慮することは、彫刻部会員の使命であります。一〇〇回展の節目を二科会彫刻部の今後の動向を決定する時期として捉え、この大きな課題に取り組むことが必須のことと思います。

99回展の彫刻展示に責任を担った展示企画委員会の会員名を記しておきます。

(二年目)○登坂秀雄、千本木康亘、杉本繁、前田耕成、津田裕子、岡村謹史、上田快、日置万里

(一年目)○菅原二郎、小林亮介、西村文男、阿部鷲丸、宮澤光造、嶋崎達哉、信時茂、中村淳子

以上十八名。

彫刻部集合写真

会員になって ―制作の視点

池田 嘉文

私の制作は群像を作ることでした。子供の頃の記憶の追想やポップカルチャーのフィギュアに心ひかれて、というようなさまざまな原因から群像に専念することになりました。

記憶との会話、現実との対面、これからも自分らしい作品を作って行きたいと思います。

宇野　務

制作を続けていく事の難しさをここ数年感じておりました。

今回の作品制作を行う事にあたって色々考えさせられる事が多々ありました。自己を見つめてどのように作品と関わるのか、課題は多いと思っております。

時間を大切にしてこれからも作品に取り組みたいと思います。

多羅間 拓也

風は誰もが感じるものなのに、誰ひとり風を見たことがない。希望、祈り、喜怒哀楽などにも形がない。そういった目に見えないものの心象を、立体的な形にしたい。目に見えないものを語る作品が作れるように、これからも材料と格闘して、表現力を高めていきたい。

長谷川 俊廣

その日、その時身近で起きた出来事や廻りの変化を感じるままに表現し続けています。生活習慣の中での変化が形となって表れ、その形の流れを脳裏に焼きつけ制作するスタイルで毎日を過ごし、自分に問いかける視点で制作活動を行っています。

受賞作品――制作の視点

文部科学大臣賞　王と王妃　津田 裕子

ローマ賞　Silent Language　安田 明長

文部科学大臣賞　津田 裕子

この数年、死と再生を繰り返す宇宙を思い、人体は単に人間の形をしているだけではなく、地球や宇宙の全てがこめられている、そんな事を思い制作しています。既成の美意識を壊すところから、自分の求める何かが生まれるのではないかと模索し、新たな具象の世界を生み出したいと跪いています。

ローマ賞　安田 明長

作品の素材はスウェーデン産の黒御影石を使用した。台座と作品は、直径60ミリのステンレスシャフトで連結している。

シンプルで直截な造形を志向して制作している。

観る側に饒舌に語りかけるのではなく、直感的に感じるものがあれば嬉しい。

会員賞　白と黒　佐々木 至

会員賞　奏でる雲の　信時　茂

会友賞　草原　漆山 昌志

会員賞　佐々木 至

我々は、常に形を意識していますが、模様がどう表現に関与するのか、形の認識に影響するのか、確かめたく制作しました。

もう少しでも表現と関係の無い部分を無くしたいものです。

会員賞　信時　茂

何かを受け止めるかのように両手を前へと伸ばし、半歩、踏み出し立ち上がる身体。静かに内側から張りだす緊張感のあるカタチを求めて、量をつけては削り取る、そしてまたつけての繰り返し。ひとつのかたちを探す作業は続く。

受賞作品寸評

漆山 昌志

材質はインド砂岩で、横たわっている女性像。正面から見ると顔、植物を持つ手、植物、帽子と流れるように形が並んでいて好感が持てる。背面に回って観ると、はてなと、感じるところがある。人体解剖をもっと勉強すればさらに良くなる作品である。

（市川 明廣）

受賞作品寸評

彫刻の森美術館奨励賞　CLEAR
稲葉　朗

特選　沖天　古森 清五郎

特選　風が立つ　篠木 玲子

特選　吠える　吉田 朋世

稲葉　朗

足二本が全体の重量を支えている。大きな楠を丸彫りにした大作である。

エスキースの段階で、バランスを計算してから制作に入っていったのだろう、軽量化の為、内側をくりぬいてある。若い力と、勢いと、躍動感を感じさせる作品である。

（島田 紘一呂）

古森 清五郎

水平方向のボリュームのある形と、垂直に燃え立つように拡がっていく形からなっている。からみ合いながら上昇する力を感じる作品である。

水平から垂直への自然な流れや、素材の処理の一層の工夫があれば、より魅力が増すと思います。

（吉田 二郎）

篠木 玲子

風に向かって大地に屹立する女性像である。具象彫刻の難解さの中で、構成や動勢、骨格等よく考慮しつつ内心の世界を探求している。そこに詩情が宿り、作者の息遣いを感ずる労作である。今後の造形への模索は、創造の世界をさらに深める事となりましょう。

（日高 頼子）

吉田 朋世

展示会場の中央あたりに凛とそびえる様に存在するブロンズ像がある。何メートルもの高さがあると言うものでも無い。作品が非常に強固に存在するのである。まさに作者が彫刻の在り様を主張しているのである。そこに感動を覚えたのだ。作者の若く新鮮な感覚が空間におよぼした発露であろう。今後の制作が楽しみである。

（小田 信夫）

特選　瞬　長谷川 聡

新人奨励賞　存在　浜田 修子

新人奨励賞　はじめまして　与島　雪

長谷川 聡

水滴がしたたる瞬間の魅惑的な様相をモチーフに、廃棄されるはずの机の天板が、新たな命を吹き込まれ造形へと昇華、再生された。

積層材のもつマチエールと色彩が、浸食された地層のイメージと重なり「瞬」と「悠久」を同時に獲得している。

（小林 亮介）

浜田 修子

清々しく凛としたたずまいの女性像です。爽やかな色調の中に「私はここにある」という決意を声高にではなく、語っている。水の中をたゆたうような足先の動きに作者の深層心理が見え隠れしているように思います。

（二ノ宮 裕子）

与島　雪

じっとたたずむ少女の足元に寄り添う猫も、こちらを見つめています。思わず足を止めてしまう、愛らしい作品。等身大の楠丸太を木取りして、バランス良く構成されています。一作毎に上達して、表現がより自由になってきたところでしょうか。今後が期待されます。

（安田 正子）

■ 授賞式　9月3日　国立新美術館3F講堂

横前会員挨拶

■ オープニングセレモニー
テープカット　9月3日　10:00開場

ご来賓・4部代表、恒例のテープカットで開幕

99th
2014
▽
100th
2015

■ 懇親会　9月3日　リッツカールトンホテル

委嘱審査員・美術評論家
武田 厚氏のご祝辞

恒例の色紙抽選会

■ 作品研究会　9月3日

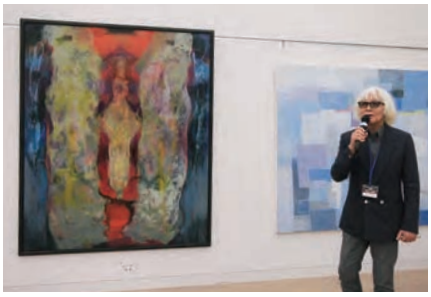
2F　展示室

3F　展示室

広報イベント

■ ギャラリートーク　9月6日・7日・13日・14日

絵画部　9月6日



絵画部　9月7日

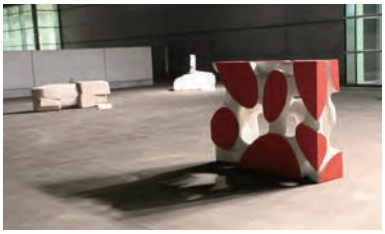
彫刻部　9月7日

絵画部　9月13日

絵画部　9月14日

■ ナイトミュージアム　9月5日・6日・12日・13日

ミニコンサート　9月12日　出演：KUKKA



野外展示場ライトアップ

■ プレ100年企画　東郷青児作品展示室

カウントダウン 二科百周年

百周年実行委員　山中 宣明

第99回二科展も盛況裡に終了し、いよいよ百周年に向けて本格的な準備の段階に入りました。吉野委員長のもと委員会設立以来、会員の金銭負担を極力減らした手造りの記念展、全員参加、歴史・現在・これからの二科の展望を示すことをスローガンに掲げて準備を進めております。委員長より総会で東京都美術館・大阪市立美術館・石橋美術館を巡回する二科百年展や国立新美術館での第百回記念二科展開催の旨が報告されご周知の事と拝察します。百年史やDVDも委員長、生方・川内常務理事、彫刻部福島編集委員、事務局を軸に、着々と進んでおりますのでご期待下さい。

岡本太郎の果たした役割や東郷芸術の素晴らしさを再認識させ好評を博したプレ展示に続き、百回展では更に特別展示コーナーを広げ、四部門の歴史を刻んだ作家を展示予定です。新しい価値を創造するという二科会の趣旨が百年に渡り脈々と受け継がれてきたアーカイブだけでなく、これからの二科がさらに輝くことを示す展示になることを願っています。

広報面では会員による世代を超えた対談や美術新聞の特集記事等による様々な角度からの広報も企画中です。また出品者全員が気軽に参加でき、百周年に立ち会えた思い出となり、外に向かって発信できるような楽しいイベント等も望まれています。会員の一人として百周年という歴史的節目に出品でき事業に関われることに、感謝と喜びをもって、皆さんと実現に向けていきたいと思います。

凄い作品を見た

中原 史雄

今年の二科展は、色々と考えさせる展覧会だった。国立新美術館1階の絵画と彫刻との間に、東郷青児作品の特別展示室があった。壁面に飾られた9点の作品の真ん中に置かれたブロンズ像「日蝕」。何げなくその立体を見て息をのんだ。人体のフォルムは、内面を抉り出したような厳しい存在感があって、どの角度から見ても空間は、張り詰め緊張感がある。かつてみたジャン・フォートリエの生々しい「人質」を彷彿とさせるリアリティーを感じる。

又初期の作品「ラケット」は、キュビズムの影響を受けているが、ジョルジュ・ブラックが、かの有名な「レスタックの家」を発表した十数年後、多視点による再構成という表現を、見事に咀嚼して描いている。他に貧困をテーマにした作品もあり、改めて画家の大きさを突き付けられた。実を言うと、東郷青児という画家をずっと長い間好きになれなかった。私が二科に初入選した60年代は、安保に揺れる社会背景で、芸術表現も人間のネガティブな部分を暴くようなテーマがもてはやされた時代だった。そのころに美術大学を卒業した者には、大衆化路線やモダニズム、浮わついたような絵、二科会での不透明さもあって、到底認められない画家だったのだ。それが、目の前の作品は、まぎれもない東郷芸術である。釘付け状態で見ていると、持ち続け、決めつけていたネガティブなイメージが一瞬に吹っ飛び、「創り手」は作品が一番大切と改めて痛感させられた。

二科会五十年の思い出

東郷青児

二科50周年回顧記念展図録より

五十年前はついこの間の様だが、今になってみると二科会の起こりや二科という名称に、どういういわれがあったか知っている人はもう少ないかもしれない。

二科会の設立は当時の文展の守旧派が、新しい傾向の作品を受け入れないために、日本画の二科制に倣って、洋画のほうも新旧二科に分ける運動を起こしたのが始まりである。大正2年10月のことで、第7回文展開催中に建議書を出した。（中略）

しかしこれは当局の受け入れるところとはならず、建議した作家を中心に在野団体を結成し、最初の建議案に因んだ二科を会の名称としたのである。（中略）

二科会はこうして進歩的作家を糾合した在野団体として発足し、以後の発展の基礎を築いたのである。このように二科会は注目のうちに発足したのであるが、新団体にふさわしく有力作家の渡欧帰朝が相次ぎ、そのいずれもヨーロッパの新しい動きと本質を伝えて、次々と重要な一石を投げかけた。新帰朝者の滞欧作の特別陳列は、その都度大きな反響と人気を呼んだものである。

また二科五十年の歩みは、新しい美術の開拓者の歩みに喩えることができるだろう。セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャンを一番早く紹介し、マヴォ・未来派・シュール・キューヴなどの運動は、外国と呼応しながら、日本では二科会から始まっている。そうした中でもたとえば、萬鉄五郎のピカソとキューヴの身をもっての紹介には印象深いものがあった。私のことを言えば未来派は私が最初であった。

当時の二科で面白いと思ったのは出品作が画家だけに限らず学者・批評家・文学者からもあったことだ。児島喜久雄・佐藤春夫・西村伊作の各氏が代表的な方々だが、佐藤春夫には面白い話がある。

三越で開いた第3回展の時に佐藤が力作を出したのだが、それを見て私はこの年の二科賞は佐藤に行くのではないかと思っていたが、図らずも私が受賞することになったために、佐藤は大いに憤慨して以後の出品をやめた。

この時代の画家は単に絵を描くだけではなく、文を能くする人もいた。その逆で、学者・批評家・文学者が画を能くしたのである。

これは、言葉を変えると美術も思想も一つの文化として、総合的に理解され発展されていたためである。今のようにそれぞれプロパーが分化しているのではなく、逆に助け合っていたのである。

その点でも二科会は新しい文化の窓口であり中心であったといえるだろう。今でも人に会ったとき、二科によって新しい文化に出会ったという話をよく聞かされる。そしてさらに二科という名前に新しい文化への郷愁をおぼえるということである。戦前の九室会の運動などは、その意味で代表的なものであろう。

（67号に続く）

被災地児童支援絵画教室　活動報告

川内　悟

東日本大震災から三年余りが経過した。四回目の被災地児童支援絵画教室を、昨年までの福島県から宮城県へと移し、東松島市立鳴瀬桜華小学校で開催した。

百年以上も歴史のある二校が統合し、開校二年目を迎えた新しい学校である。

六年生五十五名に、未来の夢の街をテーマに、各自コメントをつけて描いてもらい、その絵をヒントに、校歌の歌詞にある春夏秋冬をも加味して、題材を「宮城の四季・絆」とし、制作の指導内容を決めた。

まず導入の手始めに、校歌を斉唱してもらった。

子ども達は、みんなで歌った校歌の高揚、盛り上がりを、そのまま絵にしはじめた。「満開の桜」「花火」「紅葉とトンボ」「雪化粧」など、制作進行中の子ども達は、創作力の豊かさ、感性の素晴らしさを遺憾なく発揮した。

そして完成時、子ども達の充実感と達成感が伝わって来るのを感じた。

九万人を超えた九十九回展の観客にも、子ども達のコメント共々、大きな感銘を与えられたと思う。

制作記録小冊子を作成し、児童全員に記念品として進呈した。

チャリティー報告

絵画、彫刻、デザイン、写真、4部門の協力のもと、提供された作品の並ぶチャリティーコーナーは、来場の方々にもおなじみとなり、今年も収益の全額を寄付いたしました。寄付先は下記の通りです。

■NHK厚生文化事業団
500，000円

■東松島市災害対策本部
532，540円

10月17日には寄付先の東松島市の阿部秀安市長より感謝状が届きました事をご報告いたします。

二科会として今後も支援活動を息長く続けたいと思います。作品を提供して頂いた先生方をはじめ、ご支援頂いた皆様に、心より感謝いたします。

ショップ・4部参加のチャリティーコーナー

二科東北支部連合　経過報告

中島敏明

先般、4月の理事会に於いて、事務局より出品者の減少傾向の報告がありました。中でも東北地方は巡回展もなく、指導者（会員）が2名、会友3名と少ないためか下降傾向にあり、これに歯止めを掛け活性化を図る担当として、絵画部生方純一、川内悟、山中宣明、香川猛、大隈武夫、中島敏明、彫刻部前田耕成、以上7名が東北・北海道担当に決まりました事は、5月の会員定時総会で説明された通りです。

これらの事を9月3日、東北の各支部長と、東北・北海道担当理事・監事が、国立新美術館二科控室に於いて話し合いを行いました内容をご報告致します。

連合展に関する主な内容について

◆目的

東北地方の活動の活性化による作品の向上と、新たな出品者発掘を目的とする。

◆連合・名称

連合は当面、青森・秋田・岩手・山形・宮城・福島の東北6県とし、名称は二科東北支部連合とする。

◆組織・運営委員

青森支部長　木村精郎
秋田支部長　佐藤壮平
岩手支部長　佐々木実
山形　（現在支部なし）
宮城支部長　及川英之
福島支部長　須田美紀子
彫刻部世話役　工藤　直
◎連合世話役代表　及川英之

◆第一回展について

会期：2015年
5月8日～5月13日
（6日間）
会場：仙台メディアテーク
5階ギャラリーC
出品者：連合参加者
担当理事等賛助出品
99回展被災地児童作品
特別展示予定
※会期中、第100回記念二科展出品者募集や研修会を開催。

◇◇◇◇◇◇◇◇

東北ゆかりの第5回二科展樗牛賞の関根正二のような、東北という地域性や風土カラーを持った創造者が、本展に新たな風を吹き込んでくれる事を期待したい。

第99回　二科巡回展

◆富山展
平成26年9月20日～28日
富山市民プラザ

◆名古屋展
平成26年10月7日～19日
愛知県美術館ギャラリー

◆大阪展
平成26年10月29日～11月9日
大阪市立美術館

◆京都展
平成26年11月27日～12月7日
京都市美術館

◆広島展
平成27年1月6日～11日
広島県立美術館

◆福岡展
平成27年2月17日～22日
福岡市美術館

◆鹿児島展
平成27年3月4日～15日
鹿児島県歴史資料センター黎明館

第99回展を終え、100回展に向けて思うこと

一般社団法人二科会デザイン部 理事長　今村昭秀

第99回二科展（デザイン部は64回展）も終わり、次回が100回展を迎える節目でもあり、二科展の歴史、伝統を想い考える機会になりました。公募展の持続的発展は、時代がどう変化しても現在は過去の続きであり、変わらないためには、変わることで人と人をつなげて歴史や伝統になるわけですから、過去、現在、未来へと「つなぐ」「伝わる」がキーワードであり、それが一過性のコンクールとは違う公募展の魅力であろうと思います。4部門（絵画、彫刻、デザイン、写真）で構成されている二科展は、それぞれの部門が、それぞれの最適を目指して、部門（部分）最適を求め行動、活動していることから4部門全体の最適に繋がっていない感があります。4部門が二科会、二科展というブランド、冠を使っている以上、各部門が二科会二科展の二科精神、理念を理解し意識し、それを共有し、共に担っていくという全体観を持つことが各部の協動を誘発するのではないか、と思います。これはデザイン部が自らに向けた自省、自戒でもあります。100回展に向けてデザイン部の会員、会友に二科精神、理念を理解し、意識するべく、一体感を醸成していきたいと思っています。

デザイン部　入口

第62回 二科会写真展を終えて

一般社団法人二科会写真部 事務局長　片岡順一

一般社団法人二科会写真部は、第62回展を無事に開催することができました。

写真部展会場には、特別会員・会員・会友の作品および一般公募の入賞・入選作品の総1409点を展示しました。

会期中は連日多くの来場者があり、展示作品を熱心に鑑賞されていました。恒例の〈ギャラリートーク〉は、9月6日（土）と7日（日）の2回行い、来場者の好評を得ました。

第62回展の一般公募は「単写真部門」「組写真部門」の2部門で作品を募集し、全国から総2931名・16600点の応募がありました。審査は一次審査（4月）、二次審査（6月）と延べ5日間にわたって厳正に行いました。

写真は、その表現性においても、カメラなど機材においても、時代の変化が創作方法に敏感に影響します。写真は時代と共に変化する表現媒体であり、近年の応募作品にも、時代の流れに呼応した作品が多く寄せられています。今後、写真はどう進化するのか、大いに楽しみです。

写真部　入口

訃報　会員　伊勢谷 圭 氏

二〇一四年六月十四日逝去
享年94歳

ご遺族　平野 勝枝（妹）
〒五八〇―〇〇二五
大阪府松原市北新町一―三―一

略歴
一九二〇年　大阪府生
一九四九年　第34回展　初入選
一九六二年　第47回展特選
一九六五年　会友推挙
一九七一年　第56回展金賞
一九七二年　会員推挙
一九七五年　第65回展　会員努力賞

伊勢谷 圭先生を偲んで

森　茂子

伊勢谷圭先生の御訃報に接し、惜別の悲しみのうちに過ごして居ります。

ふり返りますと　私が会友に推挙された年から二科大阪展の会場事務所に入りましたので、そこで先生とはじめてお話しさせて頂く様になりました。それから46年の年月が流れましたが、その間先生の絵画は勿論何事にも妥協する事なく御自分の強い意志を貫き通していられるお姿に接し、その気迫に圧倒されたのを昨日の事の様に思いおこして居ります。

最近御健康を損なわれ案じて居りましたが、会期中には必ず美術館にいらして、私の作品が気になって…と話される様子はお若い時と変りなく、私に奮起や反省の気持を起こさせて下さっていました。

どうぞいつ迄も私共をごらんになっていて下さいませ。

伊勢谷圭先生、90歳になられて地元紙のインタビューに答えて（一部抜粋）

女学校に行かんと絵が描きたいっていうぐらい絵が好きやった…音楽も好きやからどっちがええやろと悩んだ時期もあったんですよ。

今から思ったら絵描きで生きることを軽く考えてたんよね。一生こんな大変なことやと思ってないから。

でも絵を描いてる時だけが我をわすれていられる時間やったから何にも思わへんかった。

私、孤独は平気よ。どこへほっといてくれても私は平気。やっぱり自分でないと出来ひんもの、誰も真似できひんものがあるからかもわからんね。私にとっては、それはやっぱり絵なんよ。

春季二科展

平成27年4月17日～23日
東京都美術館

■ベストセレクション展

来年5月に東京都美術館で開催予定の「ベストセレクション美術2015」の二科会からの出品者7名を99回展の会期中に開かれた理事会で選出しました。

絵画部は会員の横前秀幸、田浦哲也、齋藤賢司、会友の山岡明日香。彫刻部は会員の安田明長、小田信夫、会友の林一平。（生方 純一）

■トピックス

今期、最高齢受賞者となった82歳、三重県の奥山嘉男さん。最多11点の作品を出品し、2点入選、特選を受賞した。

「最高齢というのは、嬉しいですね。病気療養で1年出品を休みましたが、その間も描き続けて、11枚出品となりました。

世界遺産の街、イタリア・マテーラに魅せられ、度々訪れ描き続けています。人は描かずに、生活感を風景に取り込むことを意識しています。以前は写真部に出品経験があるが、70歳から描き始めて、入選歴は10回位。来年に向けすでに描き始めています。」

■絵画：展示者総数▶1087名
（内訳：会員143名　会友 265名　一般 676名　特別展示3名）
■彫刻：展示者総数▶141名（内訳：会員50名　会友 38名　一般 53名）
■絵画：展示作品総点数▶1173点
（内訳：会員143点　会友320点　一般697点　特別展示13点）
■彫刻：展示作品総点数▶151点（内訳：会員60点　会友38点　一般53点）

◎絵画：受賞者最年少：島崎紗椰（京都）19歳
◎彫刻：受賞者最年少：与島　雪（富山）24歳
◎絵画：受賞者最年長：奥山嘉男（三重）82歳
◎彫刻：受賞者最年長：多羅間拓也（京都）67歳・篠木玲子（埼玉）67歳

◎絵画：入選者最年少：島崎紗椰（京都）19歳
◎彫刻：入選者最年少：Emily 吉本（東京）21歳
◎絵画：入選者最年長：塩田孝子（千葉）93歳
◎彫刻：入選者最年長：高石育子（千葉）79歳

※尚、上記年齢は、未記入者を除いた記入者を対象としています。

事務局だより

「二〇一五年、二科展は一〇〇回展を迎えます」と表記されたポスターの如く、いよいよ、その年を迎えようとしております。戦争をはさんだ二科七〇年、そしてその後の現在に至る三〇年。歴史は日々更新です。

会場を国立新美術館に移してのここ数年は、改革改善を積み重ね、開かれた二科会としての一頁を紡いでいるような気が致します。

第九九回二科展の入場者数・搬入点数等は下記の表の通りです。今年は美術館の企画展示に合わせて、ナイトミュージアムが金曜・土曜の両日に開催された事に加え、メトロでの販売を止めた為か、有料入場者数がかなり増加となりました。

また会期中の四部門会議（九月十日）では次のような事が決まりました。来年の第百回記念二科展には二科会の趣旨を改めて確認し、二科展の共通の理念を掲げると共に、展示会場二階の休憩室を使用して四部門によるコラボレーション展示を予定しています。第一回目は『あそび』がテーマです。制作費等の費用については基本的に個人負担となりますが、参加して戴ける会員の先生は各部の事務局迄ご連絡下さい。

また来年は出品規約では改訂が実施されます。会員の出品作品の号数無制限条項が、**壁長三五〇cm以内**に変更され、出品者の「**未発表作品**」の定義も明確になりました。出品規約の熟読を宜しくお願い致します。

さて、丸々一年をかけて取り組んで参りました、歴代の会員・会友の名簿や受賞者記録、二科展出品者の目録や名簿等のデータ化作業もほぼ完了し、色々なお問い合わせにも迅速に対応できるようになって参りました。これも大事に保存していた資料をお寄せ下さいました先生方や、綿密な資料整理作業に従事してくれたスタッフのお陰と感謝しております。本当に有難うございました。

四つの部門の多くの人が関わり合って、歴史ある展覧会を開催するのですから、意思の疎通を大切に、事故がなく無事に歴史的瞬間を迎えられますよう、田中理事長のご指導のもと努力して参りたいと思っております。これからもお力添え、宜しくお願いいたします。

塙　珠世

表1

	入場者（昨年比）
一般当日	4,632人　（1,333増）
前売り券入場	5,045人　（561増）
高校・大学	350人　（67増）
メトロコマース	0人　（901減）
チラシ割引	679人　（92増）
チケットぴあ	137人　（32増）
団体割引	0人　（±0）
企画割引	611人　（355増）
新聞社優待券	3,239人　（591減）
有料入場者	14,693人　（948増）
無料入場者	80,194人　（7,051増）
入場者合計	94,887人　（7,999増）

表2

区分	搬入点数（昨年比）
絵画・一般	2,780点（24減）
絵画・会友	1,064点（44増）
彫刻・一般	61点（10減）
彫刻・会友	38点　（1増）
合計	3,943点（11増）

表3

展示（遺作含む）	点数（昨年比）	人数（昨年比）	35才以下出品者数（昨年比）	35才以下応募・在籍数（昨年比）
絵画・一般	697（60減）	676（55減）	50名（17減）	73名（12減）
絵画・会友	320（33増）	265（10増）	9名（1増）	9名（0）
絵画・会員	145（3増）	145（3増）	0名（0）	
彫刻・一般	53（5減）	53（4減）	19名（7減）	21名（6減）
彫刻・会友	38（1増）	38（1増）	3名（1増）	5名（2増）
彫刻・会員	60（2増）	50（0）	0名（0）	
展示合計	1,313（26減）	1,227（45減）	81名（22減）	108名（16減）

（特別展示：東郷作品を除く）

編集後記

◆プレ100回展企画、東郷作品展示室は、その足跡の大きさを改めて再確認する機会となり、会員のみならず、来場の方々にも大きな反響がありました。資料室より、二科50周年の東郷原稿を転載し、私たちの現在・100回展を考えるのも興味深いと考えました。◆99回そして100回展へ。会員各位の様々な意識によってその意味を描けないかと、会員アンケートでご協力いただきましたが、紙面の都合上春号で再構成したいと考えました。◆新会員の皆さんには「審査会に参加して」の感想を伺いました。これも次号の掲載予定でおります。ご了承ください。◆秋、春号かけて、前編後編といった形で、来季の100回展に、更に101回展を展望する気持ちをつなげたいと考えました。ご協力の各位に御礼申します。

（N）

編集委員
委員長（絵）野村　みそら
委　員（絵）本間　千恵子
〃　〃　深見　まさ子
〃　〃　金澤　英亮
〃　〃（彫）幡　青果
〃　〃　宮澤　光造

平成二十六年十月三十日発行
公益社団法人　二科会
〒160－0022
東京都新宿区新宿4－3－15
レイフラット新宿　501号室
電話　03（3354）6646
FAX　03（3354）4768